

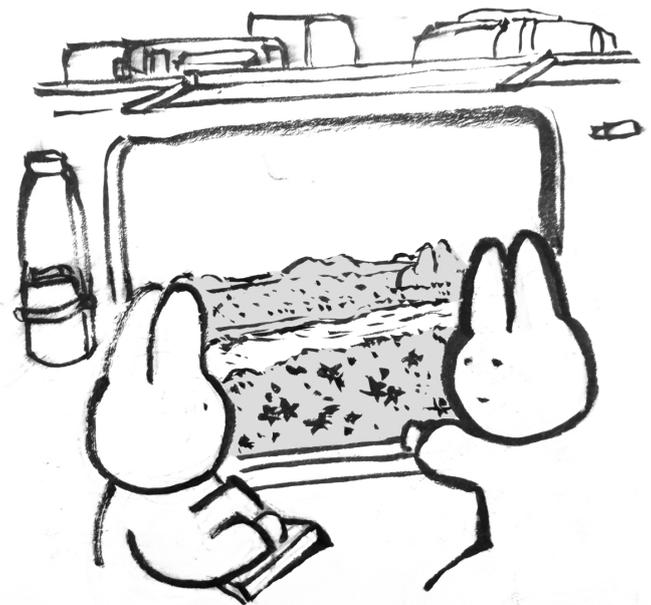


■椿淳一, 2015, 『ジョバンニの銀河、カムパネルラの地図』 同時代社.

銀河鉄道はどこを走っていたのか?というシンプルで奥深い謎を追求した1冊です。暗黙の了解とされがちな「カムパネルラの地図=星座早見盤」を否定したり、銀河の世界をジョバンニの住む町や現実世界へと重ね合わせるなど、一見すると奇抜な発想なのですが、作品から読み取れる根拠を1つ1つ積み上げた堅実な論考がなされています。

<MEMO>

# 銀河鉄道の車窓から



対象者：「銀河鉄道の夜」の世界をもっと  
知りたい人  
宮沢賢治の作品の面白さが  
つかみきれない人

## I. 天気輪の柱の下へ

「銀河鉄道の夜」は、多くの人々を惹きつけてやまない作品です。描かれる色彩感豊かな世界もさることながら、次々に登場する謎めいた登場人物やモチーフ、通奏低音として流れる死の気配が、読者の想像力を掻き立てます。星空をめぐる旅路がもっと楽しめるかもしれない、“旅のガイド”を集めました。さああなたも、銀河の世界へ。

キーワード：宮沢賢治，銀河鉄道の夜，作家論，作品論，科学

## II. 銀河ステーション改札口

■宮沢賢治，1985、『宮沢賢治全集 7』筑摩書房。

「銀河鉄道の夜」をもっと知りたいと思ったら、まずは改めて筑摩の全集で読むのがおすすめです。目にする機会の多い第4次稿だけでなく第1～3次稿が解説付きで収録されており、賢治が何を書き、何を削ったのか知ることができます。また「ひかりの素足」や「双子の星」など、他の作品との関係も示されており、全体像をつかむのに最適です。

■入沢康夫・天沢退二郎，1990、『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社。

入沢・天沢は賢治の全原稿を検討・整理し、現在の研究の基礎を築きました。本書には原稿整理の前と後に行われた彼らの対談が収録され、作品の捉え方や問題意識が検討の過程で大きく変化したことが窺えます。第4次稿が完成ではなく、手を入れた過程を含む“四次元”の作品という考え方をはじめ、深く読むための視座が数多く示されています。

■入沢康夫（監修・解説），1997、『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』宮沢賢治記念館。

賢治の手稿は入沢・天沢による検討・整理の際、全てデータ化されました。この本には「銀河鉄道の夜」の全原稿の画像が掲載されています。あまりにもたくさんの修正が悪筆でなされているため読解が難しいページもありますが、推敲の手を止められない賢治の創作スタイルを視覚的に知ることのできる資料です。

## III. アルビレオ観測所からの報告

■ますむら・ひろし，1998、『イーハトーブ乱入記—僕の宮沢賢治体験』筑摩書房。

文字で書かれた賢治作品の世界を絵として描くための葛藤や試行錯誤について、生き生きと語られています。漫画家ますむらの主観的な作品体験を追ううちに自分自身の「読む」感度も上がって来るので、一読後はぜひ改めて「銀河鉄道の夜」に戻ってみてください。ますむらの読み方への疑問を含め、きっと新たな発見があるはずです。

■寺門和夫，2013、『[銀河鉄道の夜] フィールド・ノート』青土社。

賢治が読んだ可能性のある書籍や当時の科学的見解など、現実の物証から銀河鉄道の世界に迫る試みです。図も多く説明も丁寧なので、星座の位置や三角標などなじみのないモチーフがどんなものかをイメージするヒントになります。ただし不十分な根拠から断定的な解釈を述べている部分もあるので、こちらも1つの読み方として捉えるのがよいと思います。

■大澤千恵子，2019、『〈児童文学ファンタジー〉の星図—アンデルセンと宮沢賢治』東京学芸大学出版。

現実と空想の2つの世界を多重構造で語る〈児童文学ファンタジー〉という観点から、賢治が現実の体験と自身の空想の中での体験を重ね合わせてイーハトーヴを創り出したのではないかと論じています。また「銀河鉄道の夜」の改訂に創作活動の深化を見出し、彼の法華経信仰の変容を指摘する論の運びは鮮やかです。

■香取直一，1986、『天気輪の柱と東洋の星学—瑤璣玉衡考』（「宮沢賢治」第6号）洋々社。

かなり古い小論ながら見逃せません。東洋の天文学からの研究は未だに少ないですが、賢治が仏教に親しんだことを考えると大きな可能性を感じます。作中でもとりわけ正体のつかめない存在である天気輪の柱について、西洋の星座だけを見てはたどり着けない論考が重ねられています。

## IV. 幻想第四次の地図

■私市保彦，2022、『賢治童話の魔術的地図—土俗と創造力』新曜社。

銀河鉄道を中心に論じているのは1章だけなのですが、賢治が自身の体験や信仰という個人的世界を、どのようにイーハトーヴという普遍的世界に昇華させたかが入念に検討されています。詩的／科学的な背景から鳥捕りや切符、カムパネルラは誰なのかといった謎を整理しつつ、断定を避けて読みの可能性を膨らませています。